
女王のいる家
【傲慢な女王が、人間家具に♡】
【見下した俺に買われて、逆転ザマァ♡】
【前後の孔で熱とデータを生む生体家具♡】
【オルガ・コード：アセンションシリーズ】
人間家具・強制絶頂・快楽落ち・尊厳破壊
洗練された狂気のディストピア・人間家具SF
著：XYZ_L

# 女王のいる家



最高の絶頂と引き換えに、笑顔で生きた部品に堕ちる系

ディストピア・ハードSF・生体アセットモノ

「オルガ・コード：アセンション」シリーズ

著:XYZ_L

## 1. 選ばれし者たちの昼餐と、見えざる断頭台

聖暦2060年、冬。

世界統合連合（Union）首都圏、第1管区。

かつて文明の中心であったこの巨大都市は、今は鉛色の低い雲と、皮膚を切り裂くような凍てつくビル風に支配されていた。

その中心にそびえ立つ白亜の巨塔「聖セントラル上級学院」は、未来の支配者層を育成するための巨大な温室であり、同時に来るべき選別の日を待つ若者たちの残酷な見本市会場でもあった。

最上級クラス、3年A組。

最新鋭の空調システムが微かなハム音を奏でる教室は、窓の外に広がる氷点下の極寒とは無縁の、完璧に管理された室温に保たれている。

エネルギーが枯渇し「熱」が最も高価な資源となったこの時代において、その潤沢な暖かさこそが特権階級の証であった。

昼休み。

生徒たちの多くは軍から支給される銀色の真空パックに入った「高栄養ゼリー」を無機質に啜っていた。

味気ないが、カロリー計算とエネルギー変換効率は極限まで最適化されている。

それがこの世界の「効率」という正義だった。

だが、窓際の一角だけは別世界の空気が流れていた。

「あら、久我山くん。またそんな『燃料』を補給しているの？ 味覚が退化してしまいましてよ」

鈴を転がすような、しかし明確な嘲りと優越感を含んだ声。

西園寺レイカである。

完璧にプレスされた制服に、塵一つない漆黒の長い髪。

冬の弱い陽射しを受けて輝く白磁の肌と、黒曜石のように強い意志を宿した瞳。

彼女はこの殺伐とした見本市会場に咲いた唯一の、そして絶対的な「女王」だった。



彼女はアンティークの磁器カップを優雅に傾けていた。

ふわりと立ち上る熱い湯気からは、ベルガモットの芳醇な香りが漂う。

本物の茶葉を使ったアールグレイ。

その1杯の市場価格だけで、下層市民の1ヶ月分の給与が吹き飛ぶ代物だった。

久我山ジンは口元のゼリーを拭いながら、静かに肩をすくめた。

「俺たち任官間近の士官候補生には、これが一番合ってるんだよ。それに、君のその紅茶1杯で俺の偵察用ドローンの予備バッテリーが半年分買える」

「これだから『現場主義』の殿方は困るわ」

レイカは呆れたように長く美しい睫毛を伏せ、ソーサーにカップを戻した。

カチャン、と硬質な磁器の音が静寂に響く。

微塵の隙もないその優雅な所作のまま、彼女はふと小首を傾げた。

「文化と教養、そして余裕。それこそが人間と、ただ消費されるだけの『生体部品（アセット）』を分ける境界線なのよ？」

彼女はそう言いながら、手元の最新型携帯端末をタップした。

その滑らかな眉間に、わずかな皺が寄る。

「……おかしいわね」

「どうした、彼氏から連絡なしか？」

ジンの問いに、レイカは気丈に顔を上げ、誇らしげに答えた。

「失礼ね。父様よ。議会の決算期でお忙しいのよ。昨夜から連絡がつかないけれど……きっと、連合の未来のために奔走なさっているのね。私がこの学院を首席で卒業すれば、父様にとっても最高の労いになるはずだわ」

彼女はそう信じて疑わなかった。

だが、ジンの手元にある軍用回線の端末には全く別の情報が表示されていた。

『西園寺派閥、昨夜未明に一斉拘束。反逆罪の容疑で資産凍結準備中』

ジンは端末の画面を伏せ、冷徹に薄く笑った。

彼女の言う「奔走」とは、冷たい尋問室の床で惨めに命乞いをすることだったらしい。

戦術情報部の候補生である彼にとって、この種の情報はすでに確定した「未来」に過ぎなかった。

その時、教室前方の大型ホログラム・モニターに緊急ニュース速報が流れた。

『連邦治安維持局発表：軍需産業における大規模な不正取引を摘発。主犯格は”粛清”対象へ――』

画面には、モザイクのかかった連行される男たちの映像。それを見たレイカは、明確な軽蔑の色を露わにして吐き捨てた。

「嘆かわしいわね。私欲のために連合を裏切るなんて」

彼女はソーサーを指先で弾き、凛とした声で続ける。

「私たち『選ばれた人間』の責務は、高貴なる義務を果たすことよ。裏切り者はその身をアセットに堕として、肉体ですべての罪を償うべきだわ。……そう思わない、久我山くん？」

レイカの瞳は一点の曇りもない純粋な正義感で輝いていた。

自分が断罪しているその「裏切り者」こそが敬愛する父であり、その報いが数日後の自分の身に降りかかる運命であるとも知らずに。

ジンは肩をすくめ、彼女のその無垢な残酷さに同意した。

「ああ、同感だ。罪人は最も効率的な方法で社会に貢献させるべきだな」

その言葉を、二度と忘れるなよ。

ジンは内心で冷たく毒づいた。

レイカは満足げに頷くと席を立ち、コツコツとヒールの音を響かせてジンの机に歩み寄った。

彼女の制服は塵一つなくプレスされ、漆黒の長い髪は周囲の光を吸い込むような光沢を放っている。

彼女はジンの目の前で立ち止まると、躊躇なく手を伸ばした。

不意に距離が詰まり、白檀と薔薇の混ざった高貴な香水の匂いが、教室の無機質な空気の中で鼻孔をくすぐる。

彼女の白く細い指先が、ジンの制服の襟元に触れた。



「襟が曲がっていてよ、久我山ジン」

まるで聞き分けのない幼い弟を諭すように。

あるいは出来の悪いペットを躾けるように。

彼女はジンの襟をきゅっと引き締め、規律正しく正した。

「将来、将校になるなら身だしなみは完璧になさい。……私たちが司令部から貴方たちを動かす時、駒が汚れていては指揮官の恥になるもの」

彼女自身も首席候補。

自分は選ばれる側――「A区分市民」になり、安全で暖かな後方から、泥にまみれる兵士たちを管理する人間だと信じて疑っていないのだ。

ジンは彼女の指の残像が残る襟元に触れながら、皮肉な笑みを浮かべた。

「手先が器用だな、西園寺。……その几帳面さ、意外と『現場』向きかもしれないぞ」

「冗談はおよしなさい。私が汗とオイルにまみれるなんて、あり得ないわ」

レイカは高らかに笑い、翻るスカートの裾と共に優雅に席へと戻っていった。

彼女はまだ知らない。

その「完璧な美貌」と「他者を管理しようとする高慢な自我」こそが、彼女を最高級の「生体家具」へと導く最大の評価項目（スペック）であることを。



## 2. 測定されるプライド

午後のカリキュラムは「身体機能論」。

その実態は、女子生徒にとっての事実上の製品耐久テストであり、男子生徒にとっては品定めの時間であった。

ジンたち男子生徒は、上層にあるガラス張りの見学室、通称VIPルームから、眼下の女子特別体育館を見下ろしていた。

「おい見ろよ。今日の衣装、新型だぜ」

友人の下卑た声に、ジンは視線を落とした。

暖房が意図的に切られ、吐く息が白くなるほどの極寒の中、女子生徒たちが整列している。

彼女たちが身に纏っているのは、純白の極薄レオタード。

正式名称を計測用スキン・スーツ Type-Mという。

それは衣服というより、第二の皮膚であった。

ナノファイバー製の生地は真空パックのように肌に吸着し、胸の膨らみから肋骨の浮き沈み、そして股間のラインに至るまで、肉体の起伏を容赦なく露わにしている。

心肺機能を計測するために胸元は大きく抉れ、ハイレグのラインは腰骨の位置まで鋭角に切り上がっていた。

『テスト開始。ポーズ、四つん這い・水平維持。テーブルトップ』

無機質なアナウンスと共に、女子たちが一斉に床に手をついた。

背中を反らせ、腹筋を引き締め、背骨を地面と完全に平行にする。

それは、将来テーブルや椅子といった生体家具として加工された際に求められる、基礎的な姿勢維持能力のテストであった。

「うぅ……っ、くぅ……」

開始から15分。

寒さと筋肉の疲労で、数名の女子が震え出した。

レオタードの背中部分に警告色のオレンジ色が灯ると、即座に警備ドローンが飛来し、彼女たちの背中に不適格を示す電子スタンプを無慈悲に投影していく。

だが、西園寺レイカだけは違った。

彼女は顎を引き、背筋を定規で引いたように真っ直ぐに保ち続けていた。

彼女のスーツは体温と発汗量に応じて透明化する特殊仕様である。

過酷な運動熱によって肌が桜色に上気すると生地が透け始め、その下の細い血管や、寒さで硬く尖った乳首の色までをうっすらと曝け出していた。

規定を完璧に遵守した彼女のスーツの下には下着のラインなど一切存在せず、計測の邪魔になるものは何一つ身につけていない。

「見ろよ、西園寺の背中。完璧な平面だ」

ジンは手元のタブレットで、彼女の生体データを拡大表示した。

筋電位は極めて安定しており、強靭な体幹を支える奥深くの筋肉群はSランクの数値を叩き出している。

ストレス耐性値にいたっては規格外のオーバースペックであった。

そして、深く食い込んだ股間の粘膜センサーが、ある数値を弾き出した。

湿潤度、上昇中。

「ハ、彼女……興奮してるのか？ こんな晒し者の状態で」

隣の友人が喉を鳴らす中、ジンは冷徹な眼差しで画面の数値を分析していた。

「逆だ。極限の緊張と、全裸に近い状態で視線に晒される強烈なストレスを、彼女の脳は自己防衛のために『見られている快感』や『耐えている優越感』へと無理やり変換しているんだ」

精神崩壊を防ぐための、脳の異常な防衛機制。

それこそが、支配欲求が従属欲求へと容易に反転する、極めて優秀なアセットとしての特異な資質であった。

タブレットの画面越しに、ジンは彼女の心理を正確にプロファイリングする。

自分は特別だ、自分は完璧だ、誰よりも美しく耐えてみせるとでも、そう信じ込んで強がっているのだろう。

その強烈な自尊心が彼女の肉体を鋼のように硬く維持し、同時に、限界を超えた負荷が彼女の秘部を無意識のうちに熱く濡らしているのだ。

ガラス越しに、レイカがふと顔を上げた。

汗で濡れた黒髪が頬に張り付いている。

彼女は見学室のジンを鋭く睨みつけたが、その瞳に宿っていたのは屈辱ではなく、完璧に規定をこなす私を見なさいという誇らしげな光であった。

ジンはタブレットに映る彼女の美しい背中を指でなぞった。

そこには、将来彼女の背中に置くことになるであろう熱いコーヒーカップや、重厚な革張りのシートの幻影が重なって見えていた。

「合格だ、西園寺。君は素晴らしい素材だよ」

彼女がまだ自分を人間だと信じて疑わないその瞬間、ジンの中での彼女の区分は同級生から所有物へと、静かに書き換えられていた。



## 3. 狂宴の卒業式(グランド・セレクション)

聖セントラル上級学院、大講堂。

数千人の卒業生が整列する巨大な空間は、息が詰まるほどの静寂と、張り詰めた緊張に支配されていた。

正面に浮かぶ巨大なホログラム・スクリーンが、生徒たちの運命――「区分」を無機質に宣告していく。

『A区分（市民権付与）』

無機質な電子音が響く。

『B区分（家庭用アセット）』

『C区分（公共・産業用アセット）』

名前が呼ばれるたび、歓喜の安堵と絶望の慟哭が交錯した。

この卒業式は、実のところ国家が合法的に生体リソースを収穫するための「巨大な仕分けライン」であった。

同時に、選ばれたA区分の市民たちに『一歩間違えればこうなる』という恐怖を植え付け、忠誠を誓わせるための最も効率的な「見せしめの儀式（ショーケース）」でもある。

C区分を宣告された女子生徒たちは、その場で無慈悲な警備ドローンに次々と拘束されていく。

「いやっ！ はなして……っ！」

悲鳴を上げる間もなく、彼女たちの制服は事務的な動作で引き裂かれ、全裸の素体へと剥き出しにされた。

冷たい壇上の床に押し付けられ、スリーサイズや骨盤の形状、生殖器の成熟度までが赤いレーザーで精緻に計測されていく。

『骨格フレーム、C区分基準をクリア。劣悪環境下の工業用バッテリーとして出荷』

無機質なシステム音声とともに、泣き叫ぶ彼女たちは次々と黒いコンテナへと放り込まれ、地下の搬送ラインへと消えていく。

だが、最前列に立つ西園寺レイカの背中は、その惨劇を前にしても微動だにしなかった。

父からの連絡は途絶えたままだが、自分がA区分になることは確定している。

劣った者たちが社会のバッテリーになる。

それこそがこの世界の正しい「効率」なのだと、彼女は顎を引いて毅然とした態度を崩さなかった。

そして、ついに彼女の名前が表示された。

『登録番号：SC-001 …… 西園寺 レイカ』

レイカが自信に満ちた足取りで一歩前へ出る。

優雅な礼をする準備をしていた彼女の頭上で、スクリーンが突如として血のような警告色の赤に染まった。

『判定：S級・特待管理資産』

冷酷な警告音が大講堂に鳴り響く。

『状態：全権利剥奪・即時凍結』

会場の空気が凍りついた。

レイカの完璧な笑顔が引きつり、思考が完全に停止する。

「……は？ な、何かの間違いよ。私が家具……？」

間髪入れずに、冷酷な合成音声が彼女の言葉を遮り、罪状を読み上げた。

『保護者である西園寺当主の国家反逆罪、及び敵対勢力への技術供与が発覚。当主は本日未明に処刑済み。全資産は没収。当該生徒は連座により市民権を喪失。負債補填のため、最高級生体競売へ出品とする』

「う、嘘よ！ 父様が反逆なんて……私はA区分よ！ 管理する側なのよ！」

彼女が絶叫し、ヒールを鳴らして檀上に駆け上がろうとする。

しかし、今まで彼女を守っていた家柄という名の鎧はすでに完全に剥ぎ取られていた。

黒いスーツを着た執行官たちが無慈悲に歩み寄り、彼女の両脇を乱暴に抱え上げる。

「離して！ 私は人間よ！ 家具なんかじゃないわ！ 調べ直しなさい！ 私たちは連合に忠誠を……っ！」

執行官は冷ややかな目で見下ろし、鼻で嗤った。

「おやおや。数日前、貴女は教室で高らかに仰っていたそうですね？『裏切り者はアセットに堕ちて、肉体で罪を償うべきだ』と」

レイカの顔色が蒼白になる。

血の気が引き、美しく紅を引いた唇が激しく震えた。

教室で紅茶を飲みながら言い放った自分の言葉。

それがそのまま巨大な刃となって、自身の喉元に突きつけられたのだ。

「その言葉通り、連合の所有物として社会に貢献していただきましょう。……検品を開始せよ」

「いやぁッ！ 嫌、嫌ぁッ！！」

彼女は暴れ、美しい脚で執行官を激しく蹴りつけた。

だが、無情にも鋭利なカッターが彼女の制服の襟元に差し込まれ、一気に引き裂かれる。

完璧にプレスされていた布地が無惨な音を立てて弾け飛び、中に着込んでいた純白のスキン・スーツごと剥ぎ取られた。

「あ、きゃああっ！？ や、やめて……っ！ それは……っ！」

衆人環視の中、露わになったのは、規定のスーツにそぐわないほど華美で扇情的な黒いレースと、細いガーターベルトのストラップだった。

完璧な制服の下に、彼女はA区分市民の特権階級しか手に入れられない、漆黒の総レースの下着を身につけていたのだ。

「……ほう。アセットの分際で、随分と『A区分』らしい贅沢な武装を隠していたものだな」

執行官の嘲笑が飛ぶ。

自分が選ばれる側であるという特権意識の暴走。

規律を破ってまで守ろうとした彼女の女としてのプライドが、今や彼女の淫らさと傲慢さを証明する証拠として、数千人の好奇の視線に晒された。

「分をわきまえろ、備品が」

無機質なハサミが冷たい金属音を立て、彼女の自尊心そのものである高級下着を容赦なくジョキジョキと切り裂いていく。

「あ……や、やだっ……！ 見ないで……っ！」

最後の布切れが床に落ち、レイカは完全な全裸となって大講堂の冷たい床に投げ出された。

冬の凍てつく空気が、白磁のような肌を容赦なく刺す。

身を縮めて股間を隠そうとする彼女の四肢に、検品用の冷たい金属アームが容赦なく巻き付いた。

「ひぎっ！？ あ、あぁっ……冷たい、痛い……っ！ なんで、どうして……っ！」

強制的に大股を開かされ、無機質な計測ドローンが彼女の最も柔らかな秘部へと冷酷な赤いレーザー光を這わせる。

恥辱にまみれた膣の深さや、骨盤底筋群の収縮圧といった生体データが、巨大なスクリーンに次々と数値化されて表示されていく。

『膣内温度、正常。骨盤幅、S級デバイスのホスティングに最適』

冷徹なシステム音声が響く中、A区分に残ったクラスメイトたちから、嘲笑とも感嘆ともつかない囁きが漏れ聞こえてきた。

「見なさいよ。素晴らしい骨盤ね。高級家具にぴったりだわ」

「あの無駄に高いプライド、感度変換効率が良さそうだわ。最高の熱源になるんじゃない？」

同級生たちは誰一人として彼女に同情などしていなかった。

彼らにとって全裸で検品されるレイカは、すでに人間ではなく、これから誰かの家を暖める「優秀な製品」でしかなかったのだ。

「ちが……っ、私は、人間……っ！ 誰か、たすけ……っ！」

極限の恐怖と、数千人の前で全裸のまま内部まで計測されるという異常な羞恥。

しかし、あの日の身体測定でジンが予見していた通り、強すぎるストレスと屈辱を受けた彼女の脳は、精神の崩壊を防ぐために防衛機制を働かせてしまった。

「ひっ……！ぁ、あ……っ」

恐怖で泣き叫んでいるはずなのに、冷たいレーザーの照射と無数の視線に晒された彼女の秘部は、自らの意志を完全に裏切って熱を持ち、トロリと透明な蜜を零し始めたのだ。

『局所粘膜、湿潤度80パーセントをマーク。高い熱エネルギー変換ポテンシャルを検出』

ドローンの無慈悲な宣告に、レイカは絶望の涙を流しながら、自らの股間から溢れる卑猥な水音に羞恥の悲鳴を上げた。

「ちが……っ、こんなの、勝手に……あ、あぁんっ……！」

「素晴らしい反応速度だ。見事なまでにアセット向きの身体じゃないか」

痙攣する彼女の視線の先に、一人の男の磨き上げられた靴が見えた。

久我山ジンだ。

彼は最前列に立ち、手元の端末で戦術情報部に付与された即時購入申請の特権枠を開きながら、冷ややかな目で無様に這いつくばる彼女を見下ろしていた。

「く、久我山くん……助け……て……。貴方なら、知っているでしょう？ 私がどれだけ真面目か……貴方の襟を、直してあげたじゃない……」

レイカは藁にも縋る思いで、涙に濡れた顔を上げて懇願した。

だが、ジンは優しく、しかし絶対的な捕食者の目で微笑んだ。

「ああ、知っているよ。その隠し持っていた下着の趣味も、極限状態での変換効率の良さもな。……彼女の所有権は、俺が落札する」

ジンは執行官に端末の画面を提示した。

『決済完了。所有権移転：久我山 ジン』

冷徹な電子音が、彼女の運命を完全に決定づける。

「手配を頼む。データは送信した。俺の指定した特別フォーマットで、ただの肉から『俺の家具』になるための完璧な基礎工事を終わらせろ。精神の初期化は俺の家で行う」

「え……？」

絶望に目を見開くレイカの悲痛な絶叫は、頭から被せられた分厚い黒い拘束袋によって完全に遮断された。

同級生に買われ、そのまま工場へ送られる。

それは、これから168時間にも及ぶ凄惨な肉体改造――見知らぬ他人に買われるよりも遥かに残酷な、永遠に逃げ場のない地獄の始まりを意味していた。



---

作品名：オルガコードアセンション：女王のいる家

発行日：2026年7月25日

発行者：XYZ_L

連絡先：https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。

---